

## 審査の結果の要旨

氏名 原田敦史

本論文は、諸本の錯綜する『平家物語』について、諸本相互の関係を見定める一方、個々の異本、および異本の総体としての『平家物語』の物語としての構造を究明したものである。まず冒頭の「序章」において、『平家物語』諸本論の研究史を延慶本を中心に整理したうえで、本論文全体の問題設定を明示し、その後、本論を二部各二編、つごう十章に分かつ。

第一部「平家物語の諸本の位相」は、延慶本と語り本系それぞれの位相を見定める二編から成る。第一編「延慶本『平家物語』の研究」第一章「屋島合戦譚本文考」は、古態性を強調されていた延慶本の屋島合戦譚に、後次的な改編を指摘する。第二章「横笛説話論」は、延慶本に独自性が見られる時頼・横笛の対話と高野山鑽仰の記事との、相互の有機的連関を指摘し、延慶本の個性を読み解いた。第三章「平頼盛像の造型」は、延慶本における頼盛の造型から、平家一門が「弓矢取」の集団として規定されているという、延慶本固有の性格を別決する。

第二編「語り本系『平家物語』の研究」第一章「屋代本前半部の構造」は、語り本である屋代本が、「悪行故の平家の滅び」という主題を、治承三年のクーデターに収斂させる形で構築していることを指摘し、屋代本独自の構造の存在を明らかにする。第二章「語り本の形成—巻六の叙述を中心に—」では、墨俣合戦譚の比較検討を端緒に、語り本系が読み本系の改編によって成り立っていることを押さえ、それが王法の歴史を語る物語から平家の衰亡を語る物語への構造の転換を本質としたものであることを指摘する。

第二部『平家物語』終結様式の文学史的展開」は、三種に大別される『平家物語』の終結方式の変遷についての二編から成る。第一編「終局部への視点—巻八前半部の検討から—」は、まず巻八〈宇佐行幸〉前後の叙述において、延慶本がもっとも合理性をもち、語り本系が後出のものであることを確認した上で(第一章)、皇位継承の問題に意識的な延慶本、平家の運命に焦点化する屋代本、皇統の対立を巧みに隠蔽する覚一本、という相違を析出する(第二章)。

第二編「終局部の構造と展開」は、語り本系の終局部は、延慶本のそれを刈り込んで出来たと言われてきたが、その延慶本の終局部が、実は独自の改編を経たもので語り本の祖本たりえず(第一章)、「頼朝賛嘆型」のその結末が、平家子孫断絶を意味づける、「断絶平家型」の終結の一亜種に過ぎないものであると規定する(第二章)。第三章「断絶平家型の生成」は、王法の歴史語りを志向する読み本系に対し、平家の滅亡へと焦点化するところに語り本系固有の物語の生成があるとし、第四章「覚一本の成立」は、覚一本の終結様式が、乱世の浄化と秩序回復の願いを込めたもので、延慶本的内容を含みこみつつ新たに形成されたものであることを論証する。

本論文は、諸本それぞれに深められた研究史を踏まえつつ、『平家物語』とはどういう物語なのかという根本問題に、説得的かつ緻密な読み込みによって切り込み、終結様式の構造の解明をはじめ多くの成果をあげ、研究史の行き詰まりを打破する方向性を提示している。さらに他の異本や『平家物語』以外の作品にも目を向け、この物語の文学史的な位置付けに進むべきであるなど今後の課題も存するが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)の学位に十分値するとの結論に至った。